

承和二年十二月三日官符の歴史的意義

― 鎮守府管轄地域を中心とする陸奥出羽の支配強化 ―

窪 田 大 介

はじめに

大石直正氏は「六箇郡の司」「東夷の酋長」安倍氏の登場は九・一〇世紀のエミシ^①反乱に対する王朝国家側の対応であり、そのエミシ反乱は、国司や王臣家などの中央勢力とエミシとの間の交易活動のもたらす様々な矛盾が爆発したものであると論じた。^②

中央勢力と蝦夷との交易の問題に新しい視点を導入したのは、今泉隆雄氏の朝貢・饗給についての研究である。^③

今泉隆雄氏は「化外民たる蝦夷を支配下につなぎとめておくための二つの方策」として朝貢・饗給を位置づける。服属したエミシは、毎年京または国府城柵の地方官衙へ来朝して「調」を貢進するという朝貢を行った。朝貢には令に關係する規定がある。職員令の玄蕃頭の職掌の「在京夷狄」は、朝貢のために上京したエミシを主とする夷狄に関するものであり、同じく奥羽三国の守の職掌の撫慰^④饗給は国府・城柵に朝貢するエミシを対象とした。エミシの朝貢は貢進物の収取という目的をもっていたが、それ以上に国家への服属を誓約する服属儀礼としての意義が大きかった。上京朝賀よりも地方官衙朝貢において、貢進物の収取とい

う実質的意味が強かった。七七四（宝龜五）年上京朝賀を停止し、これ以後九世紀後半まで地方官衙朝貢に一本化して行われた。

今泉氏の見解は、従来「交易」という経済的視点からのみとらえられていた物品の移動について、朝貢という視点を導入して政治的な意味を与え、しかも律令国家のエミシ支配の重要な政策として位置づけもので、その意義は大きい。もちろんその意義は、第一には律令国家のエミシ支配の方策を明らかにしたという点にあるが、大石直正氏の指摘以来注目されてきた、エミシと中央勢力との交易の問題について考える際にも、基本的に考えなければならぬ論点を提出したことになる。

エミシと中央勢力の交易について述べている最近の代表的な論考を三つだけであるが取り上げて、今泉氏の朝貢・饗給論がどのように取り入れられているか一瞥してみたい。

まず、斉藤利男氏は「蝦夷社会の交流と「エゾ」世界への変容」^⑤の中で、朝貢・饗給による律令国家の支配が、九世紀には三十八年戦争前に比べて一段と東北部に浸透していったことを指摘し、同時に「公的な朝貢・饗給関係によらない「王臣諸家」「百姓」「富豪の輩」と「夷狄」「夷俘」との私的交易が、くり返し禁止されている。」と述べている。

ごく短い記述ではあるが、朝貢・饗給による律令国家の支配が、九世紀には三十八年戦争前に比べて一段と東北部に浸透していったとする点と、朝貢・饗給を「公的」ととらえ、その他のものを「私的」と対立的にとらえている点が筆者の視点と全く共通する。

熊谷公男氏は「蝦夷論と東北論」⁵⁾で、この時期の中央勢力とエミシの交易についてふれている。

氏は、律令国家期のエミシと中央勢力との交流については、朝貢関係と国司・王臣家の私的な交易の二つを特に重視し、特に後者が九世紀には主流となったとしているが、この二つを並列的にとらえており、朝貢関係や私的な交易が律令国家のエミシ支配に果たした役割にはふれていない。また、この二種類の交易の矛盾についてもふれていない。これは、熊谷氏がこの論文で交易をとりあげた目的が、「古代は東北地方の一体化と新たなエゾ観念を準備した時代」であるということとを述べるためであったためであり、律令国家のエミシ支配制度という筆者の視点とは全く違った視点から交易を取り上げているからである。しかし、一連の論考において、九世紀における律令国家の東北支配について最も包括的に論を展開している熊谷氏の、交易についての考え方の一端を知ることのできる論文ではないかと考え、あえて取り上げさせていた。

今泉氏の考えを前提として「朝貢と貢進・交易との関係およびその変質過程を問題とし」たのが熊田亮介氏の「蝦夷と古代国家」⁶⁾である。熊田氏は「朝貢の場合は古代国家にとって、蝦夷の政治的服属を確認し、それに伴って蝦夷が貢進する物産を国家が独占する場であったことを意味する」と今泉氏の説を発展させ、「しかし、九世紀に地方官衙の重要性

が増したことは単に朝貢の場が京から地方に変わったことを意味するわけではない。」と問題提起し、「上京朝賀から地方官衙朝貢への変化は、本来の朝貢の場が王臣以下現地官人を含む私的交易の場へ変貌したことを意味する」と結論づける。さらにまた「蝦夷集団側の交易への積極的関与・期待という側面も考慮する必要がある」との重要な指摘をしている。しかし、律令国家のエミシ支配という観点からみると熊田氏の見解には疑問が生じる。九世紀においても律令国家のエミシ支配の方策の基本は朝貢と饗給であったと考えられるが、朝貢と饗給が私的交易の場に変化してしまえば、律令国家のエミシ支配はどのようになされていたかが不明となるからである。

以上のように、今泉氏の朝貢・饗給制度説提出以後の、九世紀の交易に関する代表的見解を一瞥すると、斉藤氏は、朝貢・饗給と私的交易とを対立的なものとしてとらえ、熊谷氏は、並列的なものととらえ、熊田氏は、朝貢・饗給が九世紀には私的交易へ変化するものととらえている。筆者は、斉藤氏のとらえ方を支持し、私的交易を朝貢・饗給制度と矛盾するものととらえ、そのような視点から、従来しばしば取り上げられながらも、十把一絡げに扱われ、十分内容が検討されているとはいえない、九世紀の陸奥出羽の交易関係史料を再検討するものである。

この交易関係史料の検討の意義のひとつとして、延喜式にみえる陸奥・出羽の交易雑物の内容もエミシとの交易によるものが多いことに注目しておきたい。律令国家の陸奥出羽支配においてはエミシとの交易は非常に重要なものであり、本稿で検討する国家によるエミシの交易統制が、延喜式時代の陸奥出羽支配につながっていくのである。

一 承和二年以前の交易政策

(一) 宝亀五年におけるエミシの上京朝賀廃止政策の意図

エミシの上京朝賀は、七世紀中葉から宝亀五（七七四）年まで原則として毎年行われてきた。しかし、『続日本紀』にみえる宝亀五年正月庚申詔によって「蝦夷俘囚」の入朝が停止される。その理由を今泉隆雄氏は次のように述べる。⁷⁾

宝亀五年は七月に海道のエミシが反乱して桃生城を侵すという事件がおこり、三十七年間の東北大戦争のはじまりとなった年である。奈良時代後半、律令国家は東北経営において積極策を推進したため、宝亀五年頃には現地における政府と蝦夷の関係は緊張した状況になっていた。このような状況において出された入朝停止の策は、蝦夷・俘囚の負担の軽減の意図をもったものであろう、と。また鈴木拓也氏は「蝦夷の緊張が高まってきたことを承けての措置」とする。⁸⁾

しかし、八木光則氏は「この数日前、朝賀に参列した出羽蝦夷俘囚には叙位賜祿を行っており、蝦夷との緊張関係を示す明確な表徴は直前には見られず、入朝停止の経緯がはつきりしない。おそらく奥羽でかなり深刻な衝突があったものと考えられる。」としている。⁹⁾

宝亀五年において現地における政府とエミシの関係が緊張した状況になっていたことは否定できないであろう。しかし、実際には八木氏の述べるとおり、エミシとの特別な緊張関係を示す明確な表徴は直前には見られないのである。このことから考えると今泉氏と鈴木氏の見解は必ず

しも疑問の余地のないものではない。今泉氏の述べるとおり、奈良時代後半、律令国家は東北経営において積極策を推進してきた。それならば、その積極策の一環として宝亀五年正月におけるエミシの入朝停止政策が行われたと考えることもできる。それに対する抵抗として、海道のエミシの反乱が起こったのである。エミシの入朝停止はエミシ支配の強化策であり、その強化策に対して海道のエミシの反乱が起こったのである。それでは、どのような強化策だったのであろうか。

筆者は、宝亀五年における入朝停止の政策については、次のような原因を考えている。

エミシの入朝は、エミシに負担ではなく大きな利益をもたらすものとなっていた。朝貢の見返りとしての祿物の給与のほかに、ことに重視しなければならぬのは、エミシが入京する際に、王臣家と相当な量の交易を行うようになっていたと推測されることである。

関市令八官司条には「凡官司未交易之前、不得私共諸蕃交易。」とあり、大宰府に新羅の外交使節が入朝する際に王臣家が交易を行っていたことがわかる。

律にも「官司未交易之前私共蕃人交易者准盗論罪止徒三年。」とあったことが知られる。¹⁰⁾『類聚三代格』十九、延喜三年八月一日太政官符。これによっても同様のことがわかる。エミシは諸蕃ではないが、¹¹⁾諸蕃同様エミシも入朝の際に王臣家と交易を行っていたことが当然推測される。

また、エミシの入朝の際の交易について考える場合、特に参考になるのは、著名な延暦廿一（八〇二）年六月廿四日太政官符（『類聚三代

格』十九)である。この官符によると、渡嶋の狄等が出羽国に來朝する際、国家に対して方物としての雜皮を貢することになっていた。しかし、王臣諸家が好皮を買い、残った悪い物を国家に提出している。律令国家に対する朝貢を本来の目的とする渡嶋の狄の來朝の際に、同時に王臣諸家との私的交易がおこなわれるようになっていたことがわかる。

これらの例から類推すると、エミシの都への入朝は、当初は、エミシの服属の誓約を意味したが、奈良時代後半には、エミシに大きな利益をもたらす王臣家との交易を伴うようになっていたと考えられる。国家はエミシが富強になることを防ぐため、また、エミシの交易物が直接王臣家の手に渡ることを防ぎ、国家がそれを独占するために、エミシの入朝を停止したのである。

鈴木拓也氏によれば、国家は、それまでエミシの地方官衙朝貢と都での朝貢を平行して行っていた。それがこのとき地方官衙朝貢に一本化された。¹³⁾鈴木氏は、この一本化が、上京朝賀廃止の当初からの意図ではなく、三十八年戦争の結果上京朝賀が停止されたままになり、結果的に生じたものという立場をとっている。しかし、筆者は、このエミシの朝貢の地方官衙への一本化政策を、三十八年戦争開始以前の宝龜五年正月に決定された、国家によるエミシの交易支配の強化にとらえる。

宝龜五年正月廿日の「詔停蝦夷俘囚入朝」という記事がみえる直前の正月十六日に、出羽のエミシの饗給が行われた記事がみえる。その直後の二十日に、来年の正月に行われる入朝の停止を決定するというのは、エミシとの緊張の高まりを原因と考えた場合いかにも不自然である。朝貢・饗給のために上京していたエミシの王臣家との交易の有様が目に余

るものであったことを背景として決定された政策と考えた方が自然である。

鈴木氏は、宝龜五年の上京朝賀停止政策と同時になされたエミシの朝貢の地方官衙朝貢への一本化政策は、国司への叙位の権限の委譲という政策をも伴っており、エミシの朝貢の地方官衙への一本化と連動して運用されたものであったとする。この点については筆者は見解を保留したい。

「蝦夷俘囚」の入朝が廃止された六か月後の宝龜五年七月に海道のエミシの反乱が発生して、三十八年戦争が始まるが、このエミシの反乱発生の原因の一つが、宝龜五年正月の「蝦夷俘囚」の入朝の停止により、エミシが上京交易による利益を得る機会が絶たれたことであった。

村岡薫氏は『菅家後集』の有名な句「昔より夷の民の変、交関に不軌を成すなり」を引いて宝龜年間のエミシの乱の一因を交易にからんだ紛争に求めているが、¹⁴⁾三十八年戦争の発生した原因として交易を重視している点では傾聴すべき見解であると思われる。

(二) 延暦六年正月廿一日太政官符についての考察

宝龜五年にエミシの入朝が廃され、エミシと王臣家の都における交易は不可能になった。王臣家は陸奥出羽国内に使いを派遣してエミシと交易を行うようになる。その様子を示すのが延暦六(七八七)年正月廿一日太政官符(『類聚三代格』十九)である。以下に引用し考察したい。

○延暦六年正月廿一日太政官符(『類聚三代格』十九)

太政官符

應_下陸奥出羽按察使禁_中斷王臣・百姓与_上夷俘_上交関事

右、被_レ「右大臣宣」称、奉_レ勅、如聞、王臣及国司等爭買_レ「狄馬及俘奴婢」。所以、弘（犬）羊之徒、苟貪_レ「利潤」、略_レ「良竊馬」。相賊日深。加以、無知百姓、不_レ畏_レ「憲章」、売_レ「此国家之貨」、買_レ「彼夷俘之物」。綿_レ既着_レ「賊襖冑」、鉄亦造_レ「敵農器」。於_レ「理商量」、為_レ「害極深」。自今以後、宜_レ「嚴禁斷」。如有_レ「王臣及国司違_レ反此制者」、物即没_レ「官」、仍注_レ「名申上」。其百姓者一依_レ「故按察使從三位大野朝臣東人制法」、隨_レ「事推決」。

この太政官符については、紙数の都合上夷俘の動きについてのみ考えたい。

王臣と国司が争って狄馬と俘の奴婢を買っている。そのために「弘（犬）羊之徒」が身分不相応にも利潤を貪っている。

この「弘（犬）羊之徒」という語の解釈には諸説あるが、筆者は熊谷公男氏の説にしたがう。¹⁵氏はこの語について「弘（犬）羊之徒」（つまらないもの、エミシをさす）としているが、根拠は示していない。紙数の都合であろう。「つまらないもの」と解釈しているから「弘羊之徒」ではなく「犬羊之徒」と読んでいると考えられる。『青森県史資料編古代1文献史料』では「前田家本に従う」として「犬羊之徒」としているが、妥当な見解といえる。しかし、『新訂増補国史大系』の底本である東山御文庫御所蔵本に従っても、「弘」の文字の校注に「弘、前本作犬、似是」とあることから、「犬羊之徒」とするのが妥当であろう。エミシの心情を「犬羊」の語で表現する例は、『類聚国史』一九〇、弘仁八年九月丙午条、『日本三代実録』元慶二年三月廿九日乙丑条にみえ

る。

この文中の犬羊の徒すなわち夷俘の行動を筆者は次のように解釈する。夷俘同士で夷俘内部の良民身分のものを盗みあつて奴婢として国内に売り付ける。

エミシが人を捕らえる習慣があつたことは、『続日本紀』延暦五（七八六）年九月甲辰日条、『日本後紀』弘仁二（八一）年十二月甲戌条、『日本書紀』景行天皇四十年七月戊戌条などで分かる。このようにしてとらえられた人々は俘の奴婢となつた。このような習慣にもとづく行為がこのころ大量に発生したと考えられる。馬も同様夷俘同士で盗み合い王臣国司百姓に売り付ける。そのため夷俘の集団同士が危害を加え合う状態が日に日に深まっている。「相ひに賊（そこな）ふこと日に深し」という部分はこれまで全く注目されてこなかったが、このような状態を示す。延暦六年といえ、延暦八年の「征夷」の準備が延暦五年から始められているその最中である。本来なら「征夷」の背後を固めるために安定していなければならない夷俘社会なのに、非常に不安定な状態になっている。

この夷俘同士による相互的略奪行為は、国家と朝貢饗給の関係にある首長層を中心になされていたとは考えにくい。なぜなら、そのような首長層は国家にある程度把握されており、互いに争うことは難しい状況にあつたと考えられるからである。旧来の首長層を中心とする共同体から相対的に独立した集団が活動したのではないかと考えられる。

エミシの交易を担った勢力の推移という観点からこの問題を考えれば、これ以前の時代（宝龜五年段階を含む）には、エミシの交易は首長層が

把握していたと考えられる。しかし、この時期にいたり、律令国家との接触により、エミシ社会に変化が生じ、首長層から独立して交易活動を行う勢力が現れたと考えられる。律令国家が、その内部に、国家機構とは別に、王臣家や富豪層といった経済主体を抱えていたために、そのような勢力の出現が可能となったのである。それが、この延暦六年の官符にみえる夷俘（夷俘のうちの新興勢力）の活動だと考えられる。そしてこのような勢力の出現が、承和二年に問題となる夷俘の入京の前提となると考えられる。

延暦六年官符によると、夷俘は以上のようにして俘奴婢と馬を手に入れた、王臣国司百姓に売っていた。そして綿と鉄を手に入れ、それを国家に対して「賊」であり「敵」であったエミシ、すなわち、胆沢地方などのエミシに売っていた。そして国家に対して「賊」・「敵」であったエミシたちはそれを襖胄として着、農器に改造して使用していた。

襖胄については『新日本古典文学大系続日本紀三』補注24―16に詳しい解説があり、陸奥・出羽にかかわる多数の記事の存在が指摘されている。⁽¹⁸⁾ また、この襖胄という語の存在により、この官符の『新訂増補国史大系』本、すなわち、東山文庫御所蔵本の返り点と振り仮名の誤りが解る。（「犬羊」を「コウヤウ」と訓じたのも、同種の誤りであろう。）熊田氏や熊谷氏や鈴木氏や『青森県史資料編古代1文献史料』は、すでにこの官符の中のこの語を襖胄と読んでいる。

ここで注目しなければならないことは、夷俘と呼ばれた服属したエミシが、「賊」・「敵」である未服属のエミシと王臣国司百姓の間に立って中継貿易的な交易をしていたという事である。これはエミシが自分たち

の生産したものを売るだけではなく、より遠方の集団との中継をしていたことを示す一例である。鈴木拓也氏は後に引用するように延喜式にみえる陸奥出羽の交易雑物の大部分がエミシとの交易によって手に入れたものであることを指摘しているが、その問題とも関連づけて考えなければならぬ史料である。関口明氏は「此国家之貨」は渡島蝦夷にまで渡っていたことを指摘している。⁽²³⁾

次に注目したいのが「苟食利潤」という部分である。交易に携わる夷俘は、この交易によって大きな利益を収めており、それが律令国家から警戒されていたことがわかる。おそらく、この交易による利益は、交易に携わる勢力の、旧来の共同体からの相対的な独立の支えになったと思われる。

筆者は、王臣及び国司等の夷俘との交易がこの官符で初めて禁止されていることにも注目したい。（エミシと百姓の交易は「大野東人制法」ですでに禁止されている。）宝龜五年以前にも国司はもちろん王臣と夷俘との交易も陸奥出羽でおこなわれていたと考えられるが、この官符により初めて禁止されるということは、宝龜五年以前には、王臣・国司の陸奥出羽の交易よりも、エミシが交易物を都に持ち運んで行う交易の重要性が高かったことを示すと考えられる。

（三）弘仁六年三月二十日太政官符についての考察

弘仁六（八一五）年三月廿日、陸奥出羽から馬を出すことを禁ずる太政官符が出される。この官符について触れたい。

大同・弘仁年間には徳政争論による「征夷」中止の決定を承けて、坂

東諸国を征夷にかかわるあらゆる負担から解放する政策がとられた。⁽²³⁾さらに弘仁六年八月には、陸奥国の軍制が大きく改変される。鎮兵制が全廃され、代わりに勲位者からなる健士という新しい兵制が導入されたのである。⁽²⁴⁾

弘仁六年三月の禁令もこの陸奥国の軍制改変と関係するとみられる。しかしそれと同時に、王臣家や富豪層の陸奥出羽での活動が「征夷」後の陸奥出羽の社会の安定の大きな障害となっていることを背景としているとみられる。以下、史料を引用して考察したい。

○『日本後紀』弘仁六年三月辛卯条

勅、軍用之要、以馬為先。今聞、權貴之家、富豪之輩、通使於辺邑、求馬於夷狄。部内、由其不肅。兵馬所以欠乏。宜依延暦六年格、禁買陸奥・出羽両国馬。若有違犯、直以嚴科、物即没官。但駄馬之色不在禁限。

○弘仁六年三月廿日太政官符(『類聚三代格』十九)

太政官符

禁断出馬事

右中納言兼右近衛大将從三位行陸奥出羽按察使勲三等巨勢朝臣野足奏狀稱、軍団之用、莫先於馬。而權貴之使、豪富之民、互相往來、搜求無絶。遂則託煩吏民、犯強夷獠。国内不肅、大略由之。非唯馬直踊貴、兼復兵馬難得。仍去延暦六年下臈勅符特立科條。而年久世移、狎習不遵。望請、新下嚴制、更增禁断者。被右大臣宣稱、奉勅宜強壯之馬堪充軍用者勿出_レ国堺。若違此制者罪依先符、物即没官。但駄馬者不在禁

限。其出羽国宜准此。

この官符についてまず第一にふれておかねばならないことは、延暦六年官符との相違である。延暦六年官符やこの官符、および次章で取り上げる承和二年十二月三日官符は、類似史料として一括して扱われることが多い。しかし、筆者は、史料相互の相違に注目することが必要であると考える。

鈴木拓也氏は「国司の私的交易を禁ずる法令は、延暦六年以降出されておらず、九世紀には王臣家・富豪層の交易だけが禁止されている。これは中央政府が国司の交易を黙認するようになったことを示す。」と重大な指摘をしている。⁽²⁵⁾弘仁六年三月廿日太政官符は、一見延暦六年の官符を踏襲して出されたもののようではあるが、延暦六年の官符と大きく異なった内容を持つものであり、下された目的も大きく異なるものであった。

延暦六年官符は、王臣国司百姓と夷俘の交易により、夷俘が利潤を得て富裕化すること、夷俘社会が不安定化することを防ぐとともに、特にも綿や鉄などの「国家之貨」が「賊」「敵」である胆沢地方のエミシに渡ることを防ぐために出されたものであった。すなわち、何よりも、「征夷」を主たる目的とするものであった。

弘仁六年の官符は、朝貢饗給体制を媒介とする交易雑物制により、鈴木氏の言うように私利を得つつも、陸奥出羽の支配を推進しようとしていた陸奥出羽按察使が、その体制維持の障害となる、王臣家や富豪層の陸奥出羽での交易を禁じようとするものである。

この官符の中で、延暦六年の官符が出された理由が「軍団之用、莫

先「於馬」。(中略)兼復兵馬難得。」ととらえなおされていることが注目される。実際には延暦六年官符は、鉄と綿という「国家之貨」が胆沢地方のエミシに渡ることを防ぐために出されたものであったから、弘仁六年官符においては目的がすり替えられている。実際の目的が異なっているにもかかわらず、この官符を延暦六年官符にもとづくものとしなければならなかったのは、陸奥国から馬を出すことを禁ずることが困難なことであつたからである。それは、『日本三代実録』貞観十二(八七〇)年二月廿三日乙巳条に載る大宰大貳藤原冬緒の起請にみえるように、貞観十一年の新羅の海賊の豊前国の年貢の略奪事件⁽²⁷⁾といった国家的大事件の対策としてさえ、王臣家の馬の入手の禁止には強い抵抗がなされたことから推測される。とすると、先に取り上げた延暦六年官符が出された背景として、「征夷」という非常事態と、桓武天皇の強大な権力を想定しなければならない。

さて、弘仁六年の官符の中で特に注目されるのは「国内不肅、大略由之。」という部分である。当時の陸奥出羽の不安定な状態の主要な原因が、権貴の使と豪富の民による馬の交易であることとえられていたことを示す。この点は非常に注目すべきことだが、なぜ権貴の使と豪富の民による馬の交易がこの時期の陸奥出羽の社会の主要な矛盾であつたのかという問いに答えようとする研究はないようである。

筆者は以下のように考える。

古代国家がエミシを支配する主要な方策は朝貢と饗給であつた。⁽²⁸⁾この制度は、国家の必要とするエミシの特産物をエミシの首長を通じて收取し、その見返りに、エミシの首長にエミシの必要とする物資を与えるも

のであつた。国家はこの制度によりエミシの特産物を独占的に入手し、エミシ首長層は、この制度により、エミシと律令国家間の物流を一手に把握し、自己の共同体を支配する権力基盤とすることができた。しかし王臣家や富豪層によるエミシ新興勢力との私的交易は、この朝貢・饗給体制を破壊する働きをしたと考えられる。エミシと王臣家との私的交易は、国家の支配下にあるエミシの首長層以外の新興エミシ勢力と王臣家との間で行われることが多かつたと考えられ、国家の支配下にあるエミシ首長層の力を弱める性質を持ち、国家によるエミシ支配を脅かすものであつた。「国内不肅、大略由之。」という表現は、このような朝貢・饗給体制の危機という事態を背景としてなされたものであつた。

筆者は、実際には、馬以外のものも盛んに交易されており、国司による朝貢・饗給体制にもとづく支配の障害になっていたと考える。この官符で馬だけが取り上げられているのは、過去に馬に関してだけ禁令(延暦六年官符)が出されているからである。

ここで注目しておきたいのは、朝貢・饗給と私的交易の違いである。

鈴木氏は、朝貢饗給と国司による私的交易を区別し、私的交易を現地官人によるものと王臣家の使いによるものとに区別している。⁽²⁹⁾長期間を考慮に入れて厳密に考えればそのとおりであるが、この時期の状況に限定して、国家による蝦夷支配に与える影響という視点から見ると、筆者は、鈴木氏の言う朝貢・饗給と、国司による私的交易を、明確に区別できないものと考え、「朝貢・饗給とそれに伴う国司による私的交易」として一括してとらえ、この時点では国家による蝦夷支配の推進に役立っていたものと考え(出羽の元慶の乱などの時とは程度が違っていたと考え

る)。そして、それに対して、王臣家や富豪層によるものを「私的交
易」として対立的にとらえ、国家によるエミシ支配の障害になっていた
ものにとらえている。鈴木氏自身「九世紀の両国の国衙財政は、国司の
収益を最優先にして運営されており、しかもそれが何らかの形で蝦夷支
配と結びついているのである。」(傍点筆者)という重要な指摘をしてい
る。

二 承和二年十二月三日官符の示す政策

(一) 承和二年十二月三日官符についての考察

① 承和二年までの夷俘の入京の理由

承和二年までの夷俘の入京を示す史料は次のものである。

○『続日本後紀』承和二(八三五)年十二月甲戌条

夷俘出境、禁制已久。而頃年任意、入京有徒。仍下官符、謹
責陸奥出羽按察使并国司・鎮守府等³¹。

この記事で興味深いのは夷俘が自分たちの意志で徒党を組んで入京し
ている事である。しかも頃年とあるから、このごろのことであり、一度
や二度ではなく、入京が常態化していることがわかる。一体夷俘はなん
のために入京したのであろうか。これまで、この史料を取り上げた論考
は少なくないが、このエミシの入京の目的についてふれている論考は管
見の限りでは、簗島栄紀氏と鈴木拓也氏と樋口知志氏の三氏によるもの
のみである。³²

簗島栄紀氏はこの記事と次に引用する『類聚三代格』承和二年(八三

五)十二月三日太政官符について、「陸奥・出羽の国堺をこえて任意に
「俘囚」「夷俘」が往来・入京」「むしろ当時の奥羽の私交易の状況と結
びつくのではないか?」としている。

鈴木拓也氏は移配俘囚にみられる「入京越訴」である可能性が高いと
している。

樋口知志氏は、私交易説に立ちながら、「北方勢力との朝貢饗給の拠
点であった徳丹城の廃止が招いた事態として考えることも可能である」
とする。

以下、私見を述べたい。

まず、簗島氏の私交易説と、鈴木氏の入京越訴説が問題となるが、入
京の目的について考えるならば、以下に考察するように交易と考える方
が妥当であろう。

エミシが政府の許可を得ずに入京した例は他にもある。弘仁四年には、
国司への訴えが取り上げられなかったり、無視されたりしたために、入
京して訴えたとみられるし、弘仁七年にも、因幡・伯耆両国の俘囚が入
京し「小事を越訴」している。³³しかし、この二つの場合は、陸奥・出羽
のエミシではなく、諸国に移配されたエミシである。それに対して承和
二年のこの事件の場合は、次に述べる承和二年十二月三日太政官符も含
めて考えると、陸奥のエミシが入京していることがわかる。従って諸国
に移配されたエミシの入京とは別の理由を想定することができる。

鈴木拓也氏は「夷俘の入京を、夷俘が遠距離交易に従事していたため
とみる説もあるが、「入京有徒」とあること、陸奥の官人がそろって謹
責されていることからすれば、移配俘囚にみられる「入京越訴」である

可能性が高い」としている。しかし、氏の二つの論拠には両方とも疑問がある。

まず、「入京有_レ徒」の読み疑問が有る。

鈴木拓也氏はこの「入京有_レ徒」を「入京して徒(いたづら)有り。」と読み、蝦夷が越訴していたとする²⁷⁾。しかし、「いたづら」は、中古までは、名詞としての用例はなく、形容動詞であり、『日本国語大辞典』『古語大辞典』『いたづらあり』と読むことには疑問の余地がある。

『続日本紀』宝龜十一年十二月庚子条に「蠢茲蝦夷、寔繁有_レ徒」とあるが、この「寔繁有_レ徒」を『新日本古典文学大系』は「寔(まこと)に繁(しげ)く徒(ともがら)有(あ)り」と読み、脚注に「まことに多くの仲間がいる、の意。書経、仲虺之誥に「簡賢附勢、寔繁有_レ徒」とあるによる。」としている。従ってこの部分も「入京の徒(ともがら)有り」と読むべきである。なお「寔繁有_レ徒」の句は『類聚国史』一九〇大同二(八〇七)年三月丁酉条にも見える。

次に陸奥の官人がそろって譴責されている点であるが、譴責される理由はすでに記事の中に明確に示されている。つまり「夷俘出境、禁制已久。而頃年任_レ意、入京有_レ徒、仍_レ」とある。従って、陸奥の官人がそろって譴責されていることを理由に、エミシが入京し越訴していたという結論は必ずしも導くことができない。むしろ史料に従えば、別の結論が導き出されるのではないだろうか。

高橋崇氏は「弘仁四年(八一三)十月、諸国司の介以上一人を「夷俘専当」者とする。(中略)夷俘などが「叛逆」をいたしたり、「京に入り越訴」があった場合「専当人」にはその状況により罪を科す、としたこ

とを、全国に及ぼしたのである。²⁸⁾」としている。全く妥当な史料解釈だと筆者は考えるが、この制度にもとづけば、入京越訴の結果責められるべきは、「夷俘専当」者であり、「陸奥出羽按察使并国司鎮守府等」がそろって譴責されるのはおかしい。

以上のように筆者は鈴木氏の見解には疑問を持つ。

夷俘の入京の目的を探るためには、このとき出されたものと思われる、後掲の承和二年十二月三日太政官符(『類聚三代格』十八)の内容を検討しなければならない。この官符は陸奥出羽按察使と国司鎮守府等を譴責したものではないので『続日本後紀』に見える官符そのものではないが「夷俘出境」という事態に対処するために、『続日本後紀』に見える官符と連動して出されたものと考えられる。この官符には俘囚が関を出入りしていたことがみえるが、関を通過していたものとして、俘囚とともに「商旅之輩」が挙げられている。「商旅之輩」はその呼称と官符に描かれている「竊買將_レ去」という行動からみて遠距離交易に従事していたと考えられる。その点から考えると、『続日本後紀』承和二年十二月甲戌条にみえる入京していた俘囚は、「商旅之輩」同様、遠距離交易に従事していたと考えるのが妥当である。このころ、俘囚が遠距離交易に從事するにいたった素地は、すでに、宝龜五年にエミシの入京朝賀が廃止されたころ、入京朝賀していたエミシが交易を行っていたと推測されること、また、延暦六年官符で、エミシが王臣・国司・百姓と「敵」「賊」との間の中継的交易を行っていたことなどによって形成されたと考えられる。

夷俘の入京交易を徳丹城廢絶に結びつける樋口氏の見解にも疑問の余

地はある。樋口氏は徳丹城廢絶を承和元年としており、樋口氏の見解に従えば夷俘の入京は承和元年以降生じたことになる。しかし該当史料『続日本後紀』承和二年十二月甲戌条では夷俘の入京を「頃年」のこととしており、夷俘の入京は承和元年になって突然生じたものではなく、一定期間続き、徐々に大規模になっていったものと考えられるからである。

② 承和二年官符の示す関制度

○承和二年十二月三日太政官符『類聚三代格』十八)

太政官符

応_下准_上長門国関勘_中過_中白河・菊多兩_上割_上事

右、得_上陸奥国解_上僻_上、檢_上旧記_上、置_上割_上以来、于_上今四百余歳矣。至_上有_上越渡_上、重_上以決罰。謹_上檢_上格律_上、無_上見_上件割_上。然則雖_上有_上所_上犯_上、不_上可_上輒_上勘_上。而此国俘囚多_上数_上、出入任意。若不_上勘_上過_上、何用_上為_上固_上。加以、進_上官雜物_上、触_上色有_上数_上。商旅之輩竊_上買_上將去_上。望_上請_上、勘_上過_上之事。一同_上長門_上。謹_上請_上官裁_上者。權中納言從三位兼行左兵衛督藤原朝臣良房宣。奉_上勅_上、依_上請_上。

承和二年十二月三日

工藤雅樹氏は、この官符に引用されている「旧記」は全国的な関のはじまりについてのべたもので、白河関と菊多関のはじまりをのべたものではないとする³⁹⁾。そう解釈するとはじめてこの官符の文章は文意が通じるようになる。

従来の研究ではこの官符は、多くの人々と物資が関を越えて往来する

例としてしか取り上げられて来なかった。しかし、この官符は、交易の規制を目的とする法令としてみた場合、明らかに弘仁六年官符よりも内容が格段に前進している。画期的な規制強化である。弘仁六年官符では規制の対象が馬だけであり、しかも、規制するための具体的な方法が示されていないかった。しかし、この官符では白河・菊多の関における勘過という具体的な、しかも、きわめて強力な規制方法を伴った内容となる。また規制の対象となる品目も、「進官雜物」という広範囲にわたった可能性もある。ここで規制される品目には馬も含まれている。なぜなら、馬を陸奥出羽から出すことは、すでに延暦六年官符と弘仁六年官符で重ねて禁じられているからである。俘囚の出入りも禁じられる。なぜなら、「夷俘出境、禁制已久。」とあるように、夷俘が陸奥出羽を出ることを禁ずる法令が既に存在していたからである。これらの禁制が勘過という具体的方法によって実行されることになったのである。それまで、白河・菊多の兩関においては、勘過がなされていなかった。おそらくこの二つの関は軍事的な役割のみを担っていたのであろう。

承和二年官符において、陸奥出羽における「商旅之輩」の交易や、俘囚の都における交易を禁止するために、律令国家は律令における関の制度を利用した。

承和二年官符の事書きに「応_下准_上長門国関_中勘_中過_中白河・菊多兩_上関_上事」とある。また陸奥国解の末尾に「望_上請_上、勘_上過_上之事。一同_上長門_上。」とある。従って長門関が手本となるのだが、長門関はどのようなになっていたのだろうか。

律令制下における関の制度については、多くの研究がある⁴⁰⁾。それらに

よると、律令制下における本来の関の制度は承和二年にはすでに消滅していた。

延暦八（七八九）年七月十四日に三国の関が一切停廃され、同年十一月十四（カ）日に摂津職の公私の使を勘過することが停止された。衛禁律第二、二十五私度関条にみえる五つの関のうち、残るものは長門関のみとなる。承和二年官符が「准「長門国関」とのべているのはこのためである。

長門関関係史料は、平野博之氏の「古代中世赤間関（長門関・下関）・竈戸関（上関）・門司関史料年表稿」に網羅されている。⁽⁴⁾

しかし、筆者にはそれを分析する準備がないので、石上英一氏の研究から学ぶにとどめたい。

氏によれば、九世紀における長門関は、軍事的要素を強く帯びてはいるが、その基本的機能は、過所を使用しての勘過によって、新羅、あるいは西海道諸国からの人や物の出入りを統制することであった。そしてその機能は律令にもとづくものであった。

また氏は、唐人商船が来着した際に、官の交易使が至る以前に、院宮王臣家が使を派遣して貨物を買うことを禁じた「延喜三（九〇三）年八月一日太政官符」『類聚三代格』十九）について「大宰府司と共に諸使の自由通行を許した関司の責任をも追求している。院宮王臣家諸使が官使より先買を行わんとすれば、当然のこととして京職等から過所を下付されえないから、私度または越度により関を度さざるをえないであろう。したがって関司が勘過を慥かにすれば諸使の私度・越度を防止して彼らの先買をとどめることもできる、というのがこの官符の認識であつ

た。」と示唆に富む指摘をしている。

さらに氏は、関の一般的機能について『続日本紀』和銅七（七一四）年二月庚寅第一条に、商布流通に関して、「其帶関国司、商旅過日、審加「勘搜」、附「使言上」と定められているように、交易の国家的管理の役割を持っていた。」という重大な指摘をしている。ただ、それが長門関でどのような手段によって実施されていたかはのべていない。

長門関の機能については、石上氏の指摘すること以外にも興味深いことがいくつかある。『日本三代実録』貞観十二年二月廿三日乙巳条によれば、豊前・長門国の関で過所を計って、一年間に千余疋の馬が関を出ていることを数えることができたことがわかる。これは両関における勘過の際に提出される過所が、公式令二二過所式に、「其毛牝牝馬牛若干疋頭」とあることに従っていることを推測させる。この時期にこの両関は機能していて、かなりの程度に勘過を実施していたことが知られる。

また、平野博之氏は長門関と長門国の軍団（豊浦団）の関係を明らかにし、軍団と関の関係を具体的に実証した貴重な研究を行っている。氏は、延暦二十一年に復活した長門国の軍団の任務の中に長門関の守固が含まれていたとする。⁽⁵⁾

白河・菊多両関については、白河団・警城団が対応する可能性がある。警城団の設置については従来承和十年以後承和十五年以前とされてきたが、近年承和初年とする鈴木拓也氏の有力な見解が発表され、菊多関との関係が注目される。ただし、鈴木氏は、警城団の設置は承和三年以降の奥郡騒乱に伴うものとする。しかし、警城団の設置を菊多関の勘過開始と結びつけて考える余地も十分あると考えられる。

三関廃止と摂津職の勘過停止以降も機能していた関として、史料上顕著なものとして、長門・門司関と白河・菊多関のほか、相模国足柄坂と上野国碓氷坂の関がある。

昌泰二年九月十九日太政官符『類聚三代格』十八により、蹴馬の党から出た強盜蜂起を防ぐため、相模国足柄坂と上野国碓氷坂に関を置いて勘過させた。その結果昌泰三年八月五日太政官符『類聚三代格』十八に引く相模国解によれば、「依^レ太政官去年九月十九日符宣、始置^レ件関^一。尔来、部内清浄、姦濫稍絶。」という状態になった。

戸田芳実氏が、蹴馬の党の歴史的意義を重視していることは周知の事実である。戸田氏は「蹴馬の党は、昌泰三年（九〇〇）の相模国解によると、足柄関設置によって沈静したかにみえるが事實は逆で」あつたとする。戸田氏の認識は正しいと思われる。しかし、筆者が注目したいのは、「律令国家から王朝国家への改革を行わせた動因」となる「政治的危機」の一環をなすほどの根本的社會矛盾の表出たる蹴馬の党の蜂起が、足柄・碓氷の両関の設置とその両関における勘過によって、たとえほんの一時的にせよ沈静化したということである。これは九世紀最末期においても関の設置と関における勘過がかなりの実効性を持つものであつたことを示す。

以上、九世紀における長門関、相模国足柄坂・上野国碓氷坂の関の様子を概観した。白河・菊多両関についても、このような律令にもとづく過所を使用した勘過の制度が適用されたと考えられる。その実効性が問題となるが、長門関が九世紀においてもかなりの程度機能している点などから、白河・菊多両関の勘過も、少なくともその実施の当初は非常に

大きい実効性をもったと筆者は考える。

白河・菊多両関についてはほかに史料がいくつか存在する。

延暦十八年十二月十日の『河海抄』および『弘人格抄』の記事（『青森県史資料編古代Ⅰ文献史料』Ⅱ―五三九）。貞観八（八六六）年正月廿日太政官符『類聚三代格』二と『日本三代実録』の同日の記事、元慶四（八八〇）年九月五日太政官符『類聚三代格』十八、『今昔物語集』卷二十六「付陸奥守人見付金得富語第十四」である。貞観八年の史料や、元慶四年の史料からは、これらの時期に菊多関や陸奥国の関がある程度機能していたことがわかる。この時期には、これらの関は、国家の陸奥出羽支配機構のなかで一定の役割を担っていたのである。しかし、承和期以降のこの両関の機能については稿を改めて論じたい。

ところで、「商旅之徒」という言葉は、陸奥出羽の交易関連史料のなかでは承和二年官符にだけ登場する。その理由は、関における勘過を問題とする史料に過去に「商旅」という言葉が使われているのにならつたからである。

その例の第一は、『続日本紀』和銅七（七一四）年二月庚寅条にみえる^④。この条にみえる制の中には「其帶^レ関国司、商旅過日、審加^レ勘搜^一、附^レ使言上^一」とある。

次に「商旅」が登場する史料は『類聚三代格』十六の延暦十五年十一月廿一日の太政官符である。この官符は、豊前・豊後の三つの津から過所を持ちつつも豊前門司の勘過を経ずに難波にわたる「官人百姓商旅之徒」について、摂津国司が勘過することを大宰府が太政官に求めたが、摂津国司の勘過機能が失われてしまったために、大宰府の願いが退

けられたという興味深い内容をもつものであるが、やはり取り締まりの対象として「商旅之徒」が登場する。また、官符の中には勘過の語もみえる。

このような前例にもとづいて、承和二年官符の発布を申請した陸奥国司は、取り締まりの対象となる交易従事者を、「商旅之輩」と呼んだと考えられる。したがって、この「商旅之輩」は、前後の史料にみえる交易従事者と区別して考える必要はない。

前後の史料にみえる多様な交易従事者に過所をもちいた勘過を行うことによって国家は陸奥出羽における交易を強力に統制したのである。

③ 承和二年官符で取り上げられた雑物の内容

承和二年官符には「進官雑物」という語が見え興味深いが、その雑物の品目について考えるためには、『続日本後紀』承和十二（八四五）年正月壬申日条と承和十二年正月廿五日太政官符（『類聚三代格』十二）が、参考になる。

この二つの史料を比べると、承和十二年官符にみえる雑物というのは『続日本後紀』にみえる「御鷹馬熊膏昆布并沙金粟草等」にあたる。「雑物」という言葉は一般的には必ずしも交易雑物を指すものではないが、官に進められていたものであるから、この史料に見える雑物とは、基本的には交易雑物、あるいは、交易雑物とは別に天皇に貢進されていたと鈴木拓也氏が述べる「御馬」「御鷹」を指すものであろう。年料別貢雑物が含まれるかどうかについては、年料別貢雑物が交易によって収取されたものではないと考えられる点、また、陸奥出羽の年料別貢雑物

の品目はエミシによる生産物とは考えられない点から、含まれていなかったと考えられる。

『続日本後紀』にみえる「御鷹馬熊膏昆布并沙金粟草等」という品目が、延喜式にみえる陸奥出羽の交易雑物の品目と一致しないことが気になる。つまり、『続日本後紀』には、延喜式にみえない「熊膏」と「粟草」がある。筆者は、承和十二年時点ではこの二品目は交易雑物であり、その後変更が加えられて、延喜式の品目となったと考える。延喜式にみえる陸奥出羽の交易雑物については、鈴木氏が次のように整理している。

『延喜式』民部下、交易雑物

陸奥国〈葦鹿皮・独干皮、数随得。砂金三百五十兩。昆布六百斤。

索昆布六百斤。細昆布一千斤。〉

出羽国〈熊皮廿張。葦鹿皮・独干皮、数随得。〉

・陸奥の砂金以外は蝦夷の生産物。朝貢―饗給という服属儀礼を介して収取。

・陸奥の昆布は弊伊村（閉村）の蝦夷が貢納。靈龜元年（七一五）

十月に、国府への道が遠いことを訴えている（『続日本紀』）ので、九世紀には鎮守府に貢納したとみられる。

・北方の毛皮は渡嶋蝦夷の特産であり（『類聚三代格』卷十九延暦二十一年六月二十四日太政官符）、渡嶋は出羽国の管轄であった

（『日本後紀』弘仁元年十月甲午条）。陸奥国の毛皮は、陸奥の蝦夷が渡嶋蝦夷と交易して入手したものを貢進したと推定される。

・馬と鷹は「御馬」「御鷹」として天皇に貢進（『続日本後紀』承和十二年正月壬申条など）。（従って交易雑物には入っていない。）

これを見ると、まず、陸奥出羽の交易雑物が公民の産物ではなく、エミシの生産物を中心としていること。また、陸奥出羽のエミシが、自らの生産物だけではなく、さらに北方のエミシと交易したものを交易雑物として納めていたことがわかり注目される。すなわち、延暦六年官符、あるいはそれ以前からの陸奥出羽における交易統制政策が、延喜式における交易雑物制に結実していることが推測されるのである。

さて、この承和二年十二月三日太政官符にみえる「進官雑物」とは、主としてこれらの交易雑物を指すものであり、これら多様な品々が含まれていたことが推測される。交易雑物は諸国においては正税出挙の利稲である額稲で交易し京進されるものであったが、鈴木氏によれば、陸奥においては調庸物を対価に交易されていた^⑤。

承和二年官符に記されている事態は、国司が調庸物でエミシと交易する以前に「商旅之輩」がそれをひそかに交易し、都に持ち去ろうとするという事態であった。さらに、「商旅之輩」のみならず「俘囚」も同様の行動をとっていた。

この俘囚の入京交易、および、陸奥出羽国内における「商旅之輩」との交易という行為は、俘囚側から見ると王臣家や富豪層との交易における自らの主体性を高める行為であったが、律令国家側から見ると、律令国家のエミシ支配の根幹たる朝貢饗給体制を破壊し、国家が警戒する俘囚の富強化をもたらす好ましくない行為であったので、国家は禁止政策をとったのである。

④ 承和二年官符から推測されるエミシ社会の状況

『続日本後紀』に「夷俘出境事、禁制已久」とある禁制を夷俘が破っていることに注目したい。

禁制を破って入京しているわけであるからこの史料にみえる夷俘は国家に対して従順ではなかったことになる。熊谷公男氏によれば、三十八年戦争後の陸奥国北辺の状況は「エミシ社会の既成の秩序が壊滅し、エミシ社会の内部が著しく不安定化した^⑥」というものであったが、その中であって、国家と朝貢・饗給関係を結んで国家に服属することによって力をつけてきたエミシ首長層^⑦のほかに、王臣家や富豪層との交易によって力をつけてきた新興の勢力の存在を推測することができる。なぜなら賜姓などによって権威づけられ、朝貢・饗給にあずかり、夷祿などの収入を与えられる首長層にとつては、律令国家と関係を持つこと自体が重要な権力基盤であり、このような反政府的な交易活動を活発に行つたとは考えにくいからである。

したがって、この時期の北奥地域は、国司と朝貢・饗給関係を結び国司に従うエミシ集団のほかに、「商旅之輩」と交易したり、さらには自ら入京交易を行つて力をたくわえる、国司に十分把握されないエミシ集団が存在し、朝貢・饗給に頼る国家のエミシ支配は、エミシ社会全体の中に十分浸透しているとはいえない状態であった。承和二年官符に示される律令国家の徹底した交易統制政策は、このような事態に対応し、朝貢・饗給制度にもとづく北奥のエミシ支配を徹底させる意図をもつものであった。

なお、この政策によって挫折してしまったものの、承和二年までの一定期間、エミシが入京交易を行っていたことは、エミシ社会の活力とエ

ミシの主体性の高揚の例として、筆者は高く評価したい。

承和年間の奥郡騒乱の原因⁽⁵⁵⁾については別稿で述べるが、本章で取り上げた承和二年の二史料に見える、エミシ社会の主体性の高揚とエミシ社会の活力を前提としなければ、承和年間の奥郡騒乱の原因は理解できないと考える。

(二) 陸奥鎮守府印下賜の意義

前節では、承和二年官符が陸奥出羽の交易統制の上で画期的な強化策であることをのべた。交易統制の強化ということは、朝貢・饗給体制によるエミシ支配の強化ということに論理的にはだちに結びつく。したがって、この時期に陸奥出羽において朝貢・饗給体制にもとづくエミシ支配の強化がおこなわれたことは間違いない。

この時期のエミシ支配の強化を示すと考えられることが、樋口知志氏によって注目されている、承和元（八三四）年の陸奥鎮守府印の下賜である。⁽⁵⁶⁾

『続日本後紀』承和元年七月辛未条に「賜陸奥鎮守府印一面。元用⁽⁵⁷⁾国印。今殊賜⁽⁵⁸⁾之。」とある。

この陸奥鎮守府印の下賜について、鈴木拓也氏は、「文書行政の上でも次第に国府から自立する方向にあった。」⁽⁵⁹⁾「鎮守府が独自の権限を行使するようになる契機として重要である。」⁽⁶⁰⁾とのべている。熊谷公男氏は、貞観十八年の最勝王経講読・吉祥悔過の公認および元慶六年の陰陽師配置とともに「鎮守府の機構を国衙なみに整備・充実させつつあったことを示すものである。」⁽⁶¹⁾としている。

樋口氏は、承和元年における陸奥鎮守府印の下賜について、これまでの研究よりも一段と重要な意義を認めている。

まず、樋口氏は、二〇〇〇年には、「3 志波城・徳丹城と蝦夷」という文章の「徳丹城廃絶、鎮守府胆沢城一城体制へ」という節において、「徳丹城廃城は、鎮守府胆沢城の機能強化、整備・拡充への動きと連動するものだった。」⁽⁶²⁾ということを説明する文脈の中で、「承和元（八三四）年に「陸奥鎮守府印」が鑄造され使用が開始されたこと（『続日本後紀』）は、北方辺境支配の拠点としての機能を鎮守府胆沢城に一本化することを公的に宣言したことを意味しよう」と述べる。⁽⁶³⁾

さらに、二〇〇二年には、陸奥鎮守府印の下賜を、「これによって鎮守府は独自の印章をもつこととなり、文書行政の上で陸奥国府から明確に分離・独立した。」⁽⁶⁴⁾と意義づける。

承和元年に徳丹城が廃絶し、同時に鎮守府胆沢城の整備・拡充が開始され、胆沢城を中心として北上盆地周辺全域を支配する体制、すなわち「鎮守府胆沢城一城体制」が成立したとする樋口氏の学説は、考古学の成果を大幅に取り入れたものであり、検討すべき点が多く、その可否については筆者は見解を保留し、今後の課題としたい。小論では、陸奥鎮守印の下賜の意義についてのみ論じたい。

樋口氏が、承和元年における陸奥鎮守府印の下賜を、鎮守府を中心とする支配体制の成立の画期としてとらえるのは卓見である。しかし、樋口氏の意義づけには不十分なところもあると考えられる。

令には印の用途が定められている。筆者は、令に定められている印の用途について考えることによって、陸奥鎮守府印の下賜の意義が明確に

なると考える。

公式令四〇、天子神璽条によれば、印には「天子神璽」と「内印」と「外印」と「諸司印」と「諸国印」があった。集解には「穴云。依令條、不_レ合_レ有_レ郡印也。師同_レ之。朱云。郡可_レ无_レ印也。有_レ国印_レ之故也者。凡印皆官作給耳。」とある。朱記によれば、印は皆官が作るものであり、従って国印は正式なものであるが郡印は正式なものではない。この朱記の説に従って考えると、陸奥鎮守府印は『続日本後紀』に「賜_レ陸奥鎮守府印一面。」とあることから「官作給」印に属し、「諸国印」と並列的な位置を持つ印と考えられる。また、前掲史料の「元用_レ国印」。今殊給_レ之。」という句から、それまで陸奥国印を用いていた用途に陸奥鎮守府印を用いるようになったことがわかる。従って、鎮守府印が下賜された時点で、諸国印の機能として令に定められた「上京公文及案、調物則印。」という機能、及び集解の古記に見える過所に捺すという機能が陸奥国から独立し、鎮守府に移されたと解釈できる。この「調物則印」という機能については、集解の朱記に「如_レ下条案調物、謂_レ三事也。非_レ調。広可_レ有_レ他物_レ之故。」とある。「三事」とは案と調物と他物を指すと考えていいのかどうか定かではないが、調以外の他物にも諸国印が捺されたことが知られ、この機能も陸奥鎮守府印は持つていたと考えられる。

令にみえる「上京公文」という語が当該期の陸奥国においてどのようなものを指すかという問題の詳細は今後の課題であるが、さしあたって、次のようなものが考えられる。

まず、戸籍である。戸籍関係史料として、陸奥国の場合、和銅元年の

陸奥国戸口損益帳⁶²の継ぎ目表に「陸奥国印」が捺してあるのが名高い。諸国の戸籍には延喜年間まで国印が捺されていたことが知られる。⁶³

承和十年四月廿八日太政官符『類聚三代格』十二は、前年の承和九年から行われた戸籍の作成による陸奥出羽の公民の実体把握の結果にもとづいて出されたものと考えられる。

「上京公文」として、次に四度公文が挙げられる。『続日本後紀』承和十二年正月壬申条および同日二十五日太政官符には陸奥出羽の「四度使」とりあげられているが、「四度使」が運んでいた四度公文も上京公文である。陸奥鎮守府印が捺された四度公文も、おそらくは陸奥国の四度使が運んでいたであろう。

次に、『日本後紀』弘仁二年三月乙巳日条の「始進_レ諸国俘囚計帳。」という記事にみえる「俘囚計帳」も『日本後紀』の文面からみると「上京公文」であったと考えられる。

このような、他のすべての国において国印が用いられたと考えられる「上京公文」に、「陸奥国印」ではなく、「陸奥鎮守府印」が使用されたとは一見考えがたい。しかし、『続日本後紀』の「元用国印」という句は、本来国印を用いていた「上京公文」にこのとき以降、一定の区域において鎮守府印が用いられたと想定しなければ解釈できない。また「殊賜_レ之」という句は、「陸奥鎮守府印」の下賜が律令制下において特殊な制度であることを示すものではないだろうか。

以上三つほど例示した上京公文は、すべて、人民の把握と収取の根幹にかかわる機能を持つ文書であり、鎮守府管轄区域におけるこれらの文書の作成機能が陸奥国府から鎮守府に移されたことの意義は大きい。こ

れによって、今まで陸奥国府で処理していた、国印の捺印を必要とする事務事項を鎮守府で処理できる事になる。これは鎮守府管轄地域の人民支配の大幅な充実が可能となる条件である。

次に、諸国印と同様の機能を持つ陸奥鎮守府印の重要な機能として、過所に捺すという機能が考えられる。諸国印を過所に用いる機能については、集解、公式令四〇、天子御璽条の古記に、「謂和銅八年五月一日格云、自今以後、諸国過所、宜用『国印』也。」とあり、『続日本紀』和銅八年五月辛巳条に「始今、諸国百姓、往来過所用『当国印』。」とある。これについて『新日本古典文学大系続日本紀一』の補注6―七七「過所に関する靈龜元年五月辛巳条の勅」に「公式令四〇の集解古記に（中略）なお、統紀五月己丑条にはじめて京職の印をあてたとあるのは、この勅と関連し、京職発給の過所に印を用いるための措置か。」とある。このように、印が過所に用いる必要に应じて下賜された例があることは、時代が下がるが、承和元年の陸奥鎮守府印の下賜を考える場合にも参考となる。

過所に国印を捺すことが必要であることは、国印と並列的な意味をもつ陸奥鎮守府印の承和元年における下賜が、承和二年の白河・菊多両関における勘過開始と見事に対応する政策であることを示すものである。従って陸奥鎮守府印の下賜は鎮守府管轄地域の俘囚や公民が、白河・菊多両関を越えて交易を行うことを防ぐ役割を最も重要な目的の一つとしたものであったと考えられる。しかし、直前に述べたような「上京公文及案、調物則印」という役割をも同時にはたしたことが考えられる。

承和二年の白河・菊多両関の勘過開始と承和元年の陸奥鎮守府印の下

賜が対応関係にあるということは、当時、白河・菊多両関を通過していた俘囚や「商旅之輩」の行っていた交易のなかで鎮守府管轄地域とかかわるものが重要な位置を占めていた事を示す。それは、先に検討した、承和二年官符にみえる「進官雜物」や、『延喜式』にみえる陸奥の交易雜物の内容からも推測される。しかし、承和二年の白河・菊多両関における勘過開始は、もちろん鎮守府管轄区域のみを対象としたものではない。陸奥出羽全体の交易統制を目的としたものであるが、陸奥出羽のなかでも特に問題が大きかった鎮守府管轄地域の交易統制が特に重視されたものと考ええる。

さて、もともと陸奥国印がもっていた機能が特定の区域に限って陸奥鎮守府印に移されたということは、陸奥国印の管轄する地域と鎮守府印の管轄する地域が明確に分けられたことを意味する。伊藤博幸氏は鎮守府領成立の過程を段階的に考察しているが、陸奥鎮守府印下賜も鎮守府領成立の重要な画期となると思われる。また、熊谷公男氏は鎮守府將軍が「受領官」に類似する権限を有していたとすれば、国府との間で相互にその管轄範囲を明確にしておく必要があったために奥六郡が定められたとするが、奥六郡は鎮守府將軍が受領官になる以前に、陸奥鎮守府印の下賜の時点でその原型が成立していたと考えられる。

諸国印の「上京公文及案、調物則印。」という機能、また、集解の古記に見える過所に捺すという機能は、国家による人民把握と収取の根幹をなす機能であることに再び注目したい。そして、諸国印の機能がこのようなものであることを考えれば、陸奥鎮守府印の下賜は、鎮守府地域の支配が、国家の周縁の地域の安全保障を目的とする軍事的支配から、

経済的な収取を中心とする支配へ、前進したことを意味する。

秋田城跡第七二次調査によって、戸籍と断定される漆紙文書、俘囚計帳と推測される漆紙文書が出土している。これらの文書は令における京進公文の案に相当するものであるが、国印は捺されていない。しかし、だからといって、鎮守府においても陸奥鎮守府印は必要なかった、ないしは、重要な意味をもたなかったということにはならないと筆者は考える。

(三) 承和年間前後の陸奥出羽の財政状況

承和二年官符の意義について考える際に注目されるのが『続日本後紀』承和十二(八四五)年正月壬申日条と承和十二年正月廿五日太政官符『類聚三代格』十二である。

筆者はこの二つの史料を前節で取り上げ、承和二年官符にみられる「進官雑物」の内容を推定できるとした。

本節では、この二つの史料が承和年間に存在することに注目したい。これらの史料からは承和十二年頃、陸奥出羽両国の国司の「私荷」が著しく多くなっていることが知られる。承和二年の官符の実効により陸奥出羽の品々の交易を国司が独占することになり、承和年間になって国司の「私荷」が著しく増えたことが、この二史料が存在する原因であると考えられる。別の言い方をすれば承和十二年の時点で国司の私荷が著しく増えているということから、承和二年の白河・菊多関における勘過の実施という政策の内容が推測できるのである。その内容とは、エミシが入京して交易していた品目、あるいはエミシが陸奥出羽国内において

「商旅之輩」と交易していた品目を、国司が、朝貢・饗給体制における朝貢物として収取し、それを「進官雑物」化するとともに「私貨」化するものであり、国家によるエミシに対する収奪の強化であった。

この官符にしても、それまで俘囚や「商旅之輩」が運搬していた物資がすべて国司の私貨(「公物」も著しく増えた)と筆者は想像している。になったことを背景として考えると非常によく理解できる。

もつとも、この太政官符に見える美濃国解には、「積習為例、経代不停。」とあり、古くからのことであることが知られるが、やはり、この時点になって解が出されたことに注目すべきである。

また、承和十一(八四四)年九月八日官符『類聚三代格』六も注目される史料である。鈴木拓也氏はこの官符の「夷狄之情、貪欲為業。長吏遂無潤沢、何以食餌彼類。」という部分について、国司がエミシと私的交易をおこなっていたと解釈すれば理解できるとしているが、この時期に、国司の私的交易の量が増加していることは、とりまおさず、国司の交易把握力が高められていることを背景にしている。国司の交易把握力の強化は、国家の交易把握力の強化を背景としている。国司がエミシと私的交易をおこなう条件を整えたのが、承和二年官符による、白河・菊多両関における勘過の開始であった。さらに、国司によるこの交易量の増大が、前掲の承和十二年官符のような事態を生むのである。

以上本章では、承和二年官符と、承和元年における陸奥鎮守府印の下賜という記事を根拠として、承和元年ころから、律令国家のエミシ支配が格段に強化されたことを論じて来た。それでは、なぜ、承和元年ころから律令国家のエミシ支配の強化がなされたのであろうか。

承和元年に徳丹城の廃止と胆沢城の整備・拡充が行われ「鎮守府胆沢城一城体制」が成立したとするのは樋口知志氏である。^⑧しかし、なぜ承和元年にそのような支配の転換がなされたかについては「平穏な時期に必要な希薄になった徳丹城を廃止したもの^⑨」と述べるのみで、十分説明されているとはいえない側面もあるように思われる。また、樋口氏は、「鎮守府胆沢城一城体制」の成立をエミシ支配の強化ととらえている訳ではない。

筆者は、承和元年から二年にかけてなされたエミシ支配の強化は、陸奥出羽と都との間の私交易の増加により、朝貢・饗給制度を用いた陸奥出羽におけるエミシ支配の危機が、承和元年頃には限界に達していたからと考える。

しかし、それと同時に、鈴木拓也氏の指摘している天長七（八三〇）年頃の陸奥出羽の財政状況の好転^⑩も、強力な政策を実施できた条件として重視したい。陸奥出羽のエミシの私的交易を禁断し、それまで私的に交易されていた品物を国家がすべて交易して収取するためには多量の調庸物が必要であるが、その調庸物の調達も天長七年頃における陸奥出羽の財政状況の好転により可能となったと考えられる。また陸奥国における鎮守府領の支配強化、さらには九世紀中葉における胆沢城の整備拡充（Ⅱ期の開始^⑪）も天長七年頃における陸奥出羽の財政状況の好転を前提としたものと考ええる。

胆沢城は設立当初は国家による予算配分によつて「造陸奥国胆沢城使^⑫」の指揮のもとに建設されたと考えられるが、九世紀中期には、陸奥の国内支配は陸奥国司に委任されている度合いが高いのであるから、胆

沢城の整備も、それが国家的政策であっても、当然陸奥国の財源で行われていたと考えられる。また、対エミシ政策の転換についても、それが国家的政策であっても、やはり陸奥国の財政状態を前提として行われたと考えられる。

おわりに

以上、宝亀五（七七四）年から、承和二（八三五）年までの史料を中心として、その時期における律令国家の対エミシ交易政策の推移を概観してきたが、結論として二つの点を強調したい。

第一点は、この期間における律令国家のエミシ支配の基本政策が、軍事力による支配のほかは、今泉隆雄氏の提唱した朝貢・饗給制度であるために、この期間を通じて、交易統制が律令国家によるエミシ支配において常に重要な課題であり、律令国家は様々な対策を講じ続けたということである。

第二点は、承和二年の白河・菊多両関における勘過の開始は、承和元年における陸奥鎮守府印の下賜と連動する政策であり、律令国家のエミシ支配の歴史における重大な画期をなすものであるということである。

この支配体制を成立させた原因は、エミシと王臣家・富豪層との交易を断ち切らなければ、朝貢・饗給制度にもとづく律令国家によるエミシ支配が不可能であるという状態にまで、エミシと王臣家・富豪層間の交易活動が活発化していたことにある。この承和元年から二年にかけて成立した支配体制はほぼ九世紀を通じて維持され、延喜式にみえる交易雑物

制に直接つながるものである。また、陸奥国印と並列的な役割を持つ陸奥鎮守府印の下賜により、陸奥国が、限定された意味においてではあるが行政上分割され、後代の鎮守府領の歴史的な出発点となる鎮守府管轄区域が成立したのも、この政策の副産物であった。

熊谷公男氏によって取り上げられた承和年間の奥郡騒乱は、承和元年から二年にかけて成立したこの支配体制と深く関わるものであり、この支配体制の内容を明らかにするためにも奥郡騒乱についての考察は不可欠である。しかし、この騒乱についての私見は別稿に譲りたい。

小論成稿直前に、簗島栄紀氏の『古代国家と北方社会』（吉川弘文館、二〇〇一年）に接した。簗島氏の著書は斬新な視点で書かれた大著であり、すぐに消化することは不可能であった。簗島氏の著書の理解は今後の課題としたい。

追記

一九九七年八月、平田耿二先生が筆者の論文の指導のために筆者の住む岩手県においてになった。そのおり、延暦六年正月廿一日官符を使って論文を書くようにとご指導いただいた。また、二〇〇一年一月には、上智史学会での発表の機会をいただいた。小論は、その際の発表の前半部を成稿したものである。平田先生のご指導に深く感謝申し上げたい。平田先生は二〇〇二年三月をもって上智大学を定年退職される。ささやかなものではあるが、小論をその記念とさせていただきます。また小論作成の際特別にお世話になった樋口知志氏、菅野文夫氏、小口雅史氏、鐘江宏之氏、平野博之氏、鈴木拓也氏、八木光則氏に厚くお礼申し上げます。

たい。

注

- (1) 本稿では今泉隆雄氏「律令国家とエミシ」(『新版古代の日本 九 東北・北海道』角川書店一九九二年)にならい、「蝦夷」・「俘囚」等を含んだ広い概念として蝦夷一般を表す場合には「エミシ」と表記することとする。しかし、史料に見える言葉をそのまま使用するほうが自然と思われる場合には、史料に出てくる言葉を使用した。
- (2) 大石直正「中世の黎明」、小林清次・大石直正編『中世奥羽の世界』東京大学出版会、一九七八年。
- (3) 「蝦夷の朝貢と饗給」高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年。前掲注(1)「律令国家とエミシ」。
- (4) 斉藤利男「蝦夷社会の交流と「エゾ」世界への変容」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流 古代王権と交流1』名著出版、一九九六年。
- (5) 熊谷公男「蝦夷論と東北論」東北学院大学史学科編『歴史の中の東北 日本の東北・アジアの東北』河出書房新社、一九九八年。
- (6) 熊田亮介「蝦夷と古代国家」『日本史研究』三五六、一九九二年。
- (7) 前掲注(3)「蝦夷の朝貢と饗給」。
- (8) 「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」『古代東北の支配構造』吉川弘文館、一九九八年。
- (9) 「蝦夷社会の地域性と自立性」『古代蝦夷の世界と交流』名著出版、一九九六年。
- (10) 滝川政次郎「衛禁律後半の脱落条文について―律令時代における私貿易の禁―」『法制史研究』一三、一九六三年。
- (11) 今泉隆雄「律令における化外人・外蕃人と夷狄」羽下徳彦編『中世の

政治と宗教』吉川弘文館、一九九四年。

(12) 熊谷公男「蝦夷の誓約」『奈良古代史論集』一、一九八五年。

(13) 前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」。

(14) 「八世紀末「征夷」策の再検討―律令軍制との関わりで―」竹内理三編『古代天皇制と社会構造』校倉書房、一九八〇年。

(15) 高橋富雄『古代蝦夷を考える』吉川弘文館、一九九一年。村岡薫氏前掲論文など。

(16) 前掲注(5)「蝦夷論と東北論」。

(17) 編集、青森県史編さん古代史部会。発行、青森県。二〇〇一年。

(18) 上田宏徳「綿襖冑」『柏原考古学研究所論集』五、一九七九年。鈴木敬三「綿甲冑と綿襖冑」『國學院雑誌』六二一九、一九六一年。

(19) 前掲注(6)「蝦夷と古代国家」。

(20) 前掲(3)「蝦夷論と東北論」。

(21) 「古代陸奥国の官制」前掲注(8)著書。

(22) 「律令国家期の城柵と蝦夷」『第二九回古代史サマーセミナー資料集・奥六郡の古代史像―律令国家期から王朝国家期へ―』二〇〇一年。

(23) 「渡島蝦夷と毛皮交易」佐伯有清編『日本古代中世史論考』吉川弘文館、一九八七年。

(24) 熊谷公男「平安初期における征夷の終焉と蝦夷支配の変質」『東北学院大学・東北文化研究所紀要』二四、一九九二年。

(25) 鈴木拓也「九世紀陸奥国軍制と支配構造」前掲注(8)著書。

(26) 前掲注(22)論文「律令国家期の城柵と蝦夷」。

(27) 石上英一「日本古代十世紀の外交」『東アジア世界における日本古代史講座』七、学生社、一九八二年。

(28) 前掲注(3)「蝦夷の朝貢と饗給」。

(29) 前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」

(30) 前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」

(31) 平川南「東北大戦争時代―東北の動乱―」高橋崇編『古代の地方史第六巻奥羽編』朝倉書店、一九七八年。新野直吉『古代東北史の基本的研究』角川書店、一九八六年。熊田亮介「蝦夷と夷狄―古代の北方問題についての覚書」高橋富雄編『東北古代史の研究』吉川弘文館、一九八六年。

(32) 史学会第九七回大会部会報告資料「九世紀における奥羽の兵乱と交流」一九九九年。

(33) 前掲注(22)「律令国家期の城柵と蝦夷」

(34) 「九世紀の蝦夷政策」『第二八回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』、二〇〇二年。

(35) 筆者も一九九八年五月の岩手史学会でエミシの入京の目的を交易とする趣旨の発表を行っている。

(36) 高橋崇「蝦夷」中央公論社、一九八六年。

(37) 第二九回古代史サマーセミナーにおける口頭での発表。

(38) 前掲注(36)「蝦夷」

(39) 『福島県の歴史』山川出版社、一九九七年。

(40) 館野和己「律令制下の交通と人民支配」『日本史研究』二二一、一九八〇年。野村忠夫「令制の美濃不破関」岐阜県教育委員会『美濃不破関』第二巻、一九七八年。滝川政次郎「過所考」(上・中・下)『日本歴史』一一八、一一九、一二〇、一九五八年。など。

(41) 下関市立大学下関産業文化研究所「教員共同研究報告書(Ⅰ)地域に関する総合研究」一九八五年。

(42) 前掲注(27)「日本古代十世紀の外交」。

(43) 「貞観十一年九月二十七日官符について―「下関」初見史料の検討―」九州大学国史研究室編『古代・中世史論集』吉川弘文館、一九九

〇年。

- (44) 「九世紀陸奥国の軍制と支配構造」、前掲注(8) 著書。
- (45) 「中世成り期の国家と農民」『初期中世社会史の研究』東京大学出版会、一九九一年。
- (46) 栄原永遠男「奈良時代の遠距離交易」『奈良時代流通経済史の研究』塙書房、一九九二年。東野治之・栄原永遠男「奈良時代の難波」『新修大阪市史』一、一九八七年。
- (47) 東野治之・栄原永遠男「奈良時代の難波」『新修大阪市史』一、一九八七年。吉田晶「国家的港津としての難波地域」『古代の難波』教育社、一九八二年。杉山宏「太政官符」『応聴自草野国崎坂戸等津往還官私船事』について『海事史研究』四五、一九八八年。
- (48) 「鷹馬」の二文字は『朝日新聞社版六国史』の『続日本後紀』による。熊田亮介「蝦夷と古代国家」『日本史研究』三五六、一九九二年。および、大石直正「奥州藤原氏の貢馬」『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館、二〇〇一年に従った。
- (49) 前掲注(22)「律令国家期の城柵と蝦夷」。
- (50) 『国史大辞典』「年料別貢雑物」項。早川庄八「律令財政の構造とその変質」弥永貞三編『日本経済史大系』一、東京大学出版会、一九六五年。
- (51) 前掲注(22)「律令国家期の城柵と蝦夷」。
- (52) 前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」。
- (53) 「九世紀奥郡騒乱の歴史的意義」虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』吉川弘文館、一九九五年。
- (54) 熊谷氏は、注(53)論文において、「三十八年戦争後の時期に、新たに律令国家の辺境政策に協力的な新興豪族層を積極的に登用し、彼らの私的武力とそれを背景とした在地での支配力に依拠したエミシ支配方式を、奥郡、とくにその北端部を占める斯波三郡でとりはじめた」として

いる。

- (55) 前掲注(53)「九世紀奥郡騒乱の歴史的意義」。
- (56) 「三十八年戦争の終結から前九年合戦まで」『第九回蝦夷研究会発表要旨』二〇〇〇年。「アテルイ降伏後の胆沢地方について」『アテルイ通信』第三二号、二〇〇〇年。前掲注(34)「九世紀の蝦夷政策」。
- (57) 前掲注(21)「古代陸奥国の官制」。
- (58) 前掲注(25)「九世紀陸奥国の軍制と支配構造」。
- (59) 「受領官鎮守府將軍の成立」羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』吉川弘文館、一九九四年。
- (60) 前掲注(56)「三十八年戦争の終結から前九年合戦まで」。
- (61) 前掲注(34)「九世紀の蝦夷政策」。
- (62) 平田耿二「東北の班田農民」『東北の歴史上巻』吉川弘文館、一九六七年。
- (63) 岸俊男「いわゆる「陸奥国戸籍」の残簡」『日本古代籍帳の研究』塙書房、一九七三年。
- (64) 「阿波国板野郡田上郷戸籍」『平安遺文』一一一八八、「周防国玖珂郷戸籍」『平安遺文』一一一九九。これらの戸籍については平田耿二「平安時代の戸籍について」『日本古代籍帳制度論』吉川弘文館、一九八六年に詳論されている。
- (65) 「奥六郡成立の史的前提」『岩手考古学』三、一九九一年。
- (66) 前掲注(59)「受領官」鎮守府將軍の成立」。
- (67) 平川南「秋田城跡第七二次調査出土漆紙文書について」『秋田城跡―平成十年度秋田城跡調査概報』秋田城を語る友の会、一九九九年。
- (68) 前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」。
- (69) 前掲注(56)の三論文。
- (70) 前掲注(56)「アテルイ降伏後の胆沢地方について」。

(71) 「陸奥・出羽の公出率制」、前掲注(8) 著書。

(72) 伊藤博幸「胆沢城発掘調査の成果」『第二八回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』二〇〇二年。

(73) 『日本紀略』延暦廿一年正月丙寅条、同年四月庚子条、同年七月甲子条にこの官職名がみえる。

(74) 鈴木拓也氏、前掲注(8)「陸奥・出羽の調庸と蝦夷の饗給」

(くぼた・だいすけ 岩手県立盛岡商業高等学校教諭)